

「書く」「話す・聞く」教材の実態に合わせた指導

日々、子どもたちを教える先生方が抱えるお悩みの中から一つを取り上げ、解決のためのアドバイスを掲載するコーナーです。
今回は、松山美重子先生と邑上裕子先生にご登場いただきます。

お悩み

「書く」「話す・聞く」の指導の際の、教科書教材の使い方が今一つ分かりません。作例が難しかったり、話題・題材が身近でなかったり……。児童の実態に合わせて指導するために、どのような使い方ができますか。



児童の実態に合った授業を行うために、教科書にある「書くこと」教材の教材文や作例は、どのように活用するとよいのでしょうか。



愛知教育大学 講師
松山美重子

解決のために

1 まずは教材文やモデル文を吟味・分析する

モデル文を作成することが必要です。具体的な教材を挙げてみましょう。

ことをお勧めします。きっと、多くの発見があるはずです。

随筆を書く (六年)

多様な表現様式を学習するという観点から、この「随筆を書く」という言語活動が新たに加わりました。教科書では、六年生の児童が随筆とは何かを知り、どのように書くのかを学ぶことができるよう、二つのモデル文を提示しています。

- これを読んで、児童とともに考えることは为什么呢。
- どんな題材を取り上げているか
- その題材の何を切り取っているか
- 文字数、構成はどのようなか
- 心ひかれる・使いたい表現はどこか
- 等、自分が随筆を書くという立場で児童にたくさん気づかせ、ワークシートに書き出させてみてください。
- さらに、教師自身が随筆を書くポイントを整理し、自分で随筆を書いてみる

この絵、私はどう見る (六年)

物語、映画、絵画などの作品のみどころやすばらしさを伝える文章を書くことを学習する教材です。

教材文では、「風神雷神図」について、作品を見る視点、受け止めたことを表す表現、具体的な記述例が示されています。が、作品評の全体モデル文は載っていません。指導の際、児童に学習の課題や流れ、書く内容の全体を捉えさせるためにも、全体モデル文が必要だということもあります。

こんな場合、教師が、文字数、構成、記述を十分に吟味したモデル文を作成するようになりましょう。直前の單元『鳥獣戯画』を読む」が書くことに生かされることを実感でき、目的的に教材文を読むうえでも有効となります。

時間がかかる、表現様式に応じた指導がよく分からない等の理由で、「書くこと」の指導に苦手意識があるという声を耳にします。

小学校国語の教科書には、紹介文、説明文、報告文、新聞記事、観察記録文、手紙、随筆など、学習指導要領で示されたさまざまな表現様式を身につけさせるため、学年に応じた「書くこと」の教材が提示されています。そして、それら表現様式を明確にした教材文や作例を示す努力がなされています。しかし、それが児童の実態や教師のねらいとは異なる場合もあはらずです。指導にあたっては、教材文の活用しかたを十分に分析し、教科書教材だけを取り上げるのではなく、モデル文を複数用意することで、その表現様式の特徴を捉えさせることが大切です。さらに、どのような「書く能力」を育てるのか、どれぐらいの文字数・構成を目指すのか、記述力に関わることや編集をどうするのか等も考慮して、教師が

松山美重子

愛知県生まれ。愛知県教育委員会義務教育課指導主事、豊田市の公立小学校校長を歴任し、現職。三河教育研究会会長や愛知県女性校長会会長の務めるなど、精力的に活動し、その授業実践には定評がある。著書に「こころの力を身につけるおもむき体験ワーク」(共著・明治図書)などがある。

では、「話す・聞く」教材を、学校や児童の実態に合わせて指導するには、どのようなことを意識する必要があるのでしょうか。



新宿区立落合第四小学校 校長 邑上裕子

解決のために

2 教科書教材に果敢に踏み込む

「話すこと・聞くこと」は、音声言語によってやり取りされる言語活動です。ですから、授業においては、「教科書の文字を読ませるのではなく、どの子にも音声を使って学習できるようにすること」が重要となります。つまり、発表や話し合いのモデルとなる音声を自分の耳で聞いて大切なことを押さえ、実際に自分で音声言語を使うことによって学ぶ必要があるのです。

そのように考えていくと、文字言語が用いられ、理想的なモデル例が示された教科書教材だけでは、十分な「話すこと・聞くこと」の指導をするのは難しいといえるかもしれません。それを補うためには、教科書教材を、ある

程度アレンジして扱うことを念頭に入れる必要があります。では、具体的にどのような工夫のしかたが考えられるのか、教科書にある「話すこと・聞くこと」単元の一つ、「わたしたちの学校行事」(三年上P108)を例に取りながら、そのポイントを確認していきましょう。

目的意識・相手意識を身近から発掘する

教科書では、地域の人たち(相手)に学校行事について説明し、学校についてよく知ってもらおう(目的)という学習活動が提示されています。ここで

と柔軟に変更することができれば、それに適した話題・題材が見えてきます。そして、それにより、相手意識や目的意識をより明確にした学習を展開することが可能となるのです。

教科書教材のモデルを作り変える

P110・111には、グループでの話し合いの様子や文字言語で示されています。話し合いの様子がほぼ全文記載されているという点では工夫が見られるのですが、実際のクラスの児童を思い浮かべながら読むとどうでしょうか。児童が日常生活で使う話し言葉とはやや離れた、丁寧な言葉遣いや、完璧なやり取りがなされているように感じられるのではないのでしょうか。ここから、言葉遣い、問の取り方、抑揚やイントネーションの入れ方といった観点で、現実の児童の話し言葉に近くなるよう、書

き換える必要があることが見えてくるでしょう。実際に、冒頭部分を書き換えてみたものが左の例です。

〈教科書例〉

今日は、ぼくが司会をします。
まず、「子どもすもう大会」のどんなところをせつめいするのかを決めます。その後、どんなふうにせつめいするかを話し合います。
…
たしかに、そのせつめいがいりますね。

〈書き換えた例〉

今日は、ぼくが司会をするね。
ええと、まず、「子どもすもう大会」のどんなところをせつめいするのかを決めようね。それから、その次にどんなふうにせつめいするかを考えよう。
…
そうだよね。ぼくたちも、はじめはよく分からなかったものね。

今、目の前にいる児童をよく見てみましょう。音声言語は、生活に密着した言語です。教科書の例をもとにして、クラスの児童の興味・関心、実態に応じた相手や目的を想定し、話題・題材を設定することが大切です。

例えば、地域の人と交流する場が身近でない実態がある場合には、「一年生に学校行事を紹介する」「幼稚園や保育園の子どもたちに学校を案内する」などといったように相手を案内することが考えられるでしょう。児童の置かれた状況を捉え、他教科、学校行事や総合的な学習の時間に体験したことを洗い出して、相手・目的を、児童がより必要感をもって取り組めるものへ

どうでしょうか。語尾を日常会話に近くなるよう書き換えただけでも、児童は実際の学習をイメージしやすくなるものです。まずは、次のような点に着目するところから始めてみるのがよいかもしれません。

- ・言葉遣いを日常の会話文に直す。
- ・友達の見解を共感的に聞く場面を置く。
- ・受けてつなげる言葉、話し始めの言葉を加える。

このような書き換えを行うことで、どの児童も話し言葉を体験し、「話すこと・聞くこと」が生きて働く場を設定することができるのです。

教科書教材に手を加えるのは骨の折れることです。しかし、より楽しくより生き生きとした実の場のある授業を行うために、「一年間に、勝負どころを一つ」という気持ちで取り組んでみましょう。



(談)

邑上裕子

東京都生まれ、小学校教諭、立川市教育委員会指導主事、東京都教職員研修センター統括指導主事等を経て、現職。前東京都小学校国語教育研究会会長。共著に「小学校国語学習指導実践事典」(東洋館出版社)「未来に生きる話し手・聞き手を育てる」(話し言葉の学習)(光村図書出版)など。